
自然がお怒りになる頃にシリーズ第五弾、古代獣の鳴き声が聞こえる頃に

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自然がお怒りになる頃にシリーズ第五弾、古代獣の鳴き声が聞こえる頃に

【Nコード】

N9311P

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

第五弾、出現。とんでもない自然の失態が対立関係復活となつて、動けなくなっていた。そこに自然の一人が紡いだ世界ができてしまった、

発掘怪談の巻 第一話 発掘始点

新しい物語へようこそ。

自然と魔女は、ただいま対立関係上動けません。

自然がお怒りになる頃にシリーズ史上、自然が一番動けにくく、魔女側も動けない状態ができていた。

福井県竜骨町の恐竜発掘場、1988年8月13日の朝

土蔵と後原は、18本目の恐竜の骨らしきものを見つけた。

「中尾さんに、渡しに行ったほうがいい。ただの石だったら、笑えるからな。」

中尾は、意志がどうかを判断していた。

「18本目の骨を見つけました。」

一方、醍為咀神社では、巫女と発掘責任者が会話をしていた。

「20本目を発掘してはなりません。」

「しかし、迷信でしょ。そんな怪談なんて存在しません。」

「いいえ、存在します。」

此の声が、聞こえた瞬間、さっきまで吹いていた風が止まった。

山野井は、背筋が凍るような気分になっていた。

「20本目も発掘しないとこれ以上は、帰ることは・・・」

「いい加減にしてください。20本目を掘り起こすとお骨様が蘇ってしまいます。」

與四田は、山野井を帰らそうとした。

「20本目を出しても、お骨様が現れなかったら、嘘になる。」

「良いでしょう。それが本当なら私は、お骨様に殺されているでしょう。」

発掘怪談の巻 第一話 発掘始点（後書き）

次回 発掘怪談の巻 第二話 20本目。お楽しみに

発掘怪談の巻 第二話 20本目（前書き）

惨劇は、終着点を探そうとしていた。

発掘怪談の巻 第二話 20本目

山野井は、疑問を抱えつつ、発掘場に戻って行った。

土蔵は、20本目を発掘したことを大いに喜んでいた。

「これでやっと20本目だ！」

それは、8月13日午後3時50分のことであった。

山野井は、不安を抱えながらも安心していた。

8月13日午後10時。

後原は、何かに追われていた。

「来るな・・・来るな！」

何かが後原を噛み殺した。

8月14日午前6時25分。

北代美は、後原の死体を見て、冷たい目線をしていた。

「20本目を発掘するからこうなるのよ。」

土蔵は、それを見ていた。

「この街の住人が次第に俺たちを敵視し始めているな。だが俺たち

は、関係ない。」

山野井は、後原の死が原因で、発掘活動を中止することを考えた。

「それは、なぜなんですか。」

中尾が山野井に言った。

発掘怪談の巻 第二話 20本目（後書き）

次回 発掘怪談の巻 第三話 発掘怪談の物語。お楽しみに

発掘怪談の巻 第三話 発掘怪談の物語（前書き）

発掘怪談は、すべてを巻き込みバッドエンドへ。

発掘怪談の巻 第三話 発掘怪談の物語

「中尾さん、一人が死んだのですよ。」

土蔵は、嫌な予感を感じ取っていた。

「今、恐竜の鳴き声が聞こえたような。」

「気のせいだろ。今日は中止だ。」

山野井は、そう言いながら帰って行った。

中尾と土蔵は、この街が妙に静かすぎることに気がついた。

「何か、変ですね。」

「確かに。中尾さん此処は逃げたほうがいいぜ。」

言いづらそうな発言を土蔵は、咳払いしてから言った。

「もう山野井さんも恐竜に襲われているかもしれない。」

中尾は、表情を青に染めた。

「土蔵さん逃げて!」

「なっ、恐竜!」

土蔵は、車に駆け込み中尾が襲われているところを恐れながら醒為

咀神社に向かった。

恐竜は、中尾の血肉の一部を落としながら、土蔵に襲いかかってきた。

「来るなよ。頼む！」

土蔵は、必死にもがき続けたが、車が大破してしまった。

「もはや、これまで。」

土蔵を襲った恐竜は、大鎌を持った謎の少女を見て恐れていた。

「あなたは、私たちが6500万年前の不正で絶滅したものです。安らかに眠りなさい。」

「お骨様の言うとおりに。」

恐竜がそう喋った後、骨だけになった。

発掘怪談の巻 第三話 発掘怪談の物語（後書き）

次回 竜骨という町の巻 第一話 リュウコツチヨウヘようこそ。
お楽しみに。

次回から、新キャラが増えます。

布江山遠海^{ふえやまとおみ}、39歳。発掘隊の一人。

沓見昭磁^{くつみしょうじ}、42歳。発掘隊の一人。

鶴賀智朗^{つるがともろう}、58歳。村の住民。最年長キャラ

黒上正旭^{くろさつえまさひ}、43歳。発掘隊の一人。

竜骨という町の巻 第一話 リュウコツチヨウへようこそ

6500万年前の惨劇は、自然の使徒による不正であることが発覚した。

3代目台風の狂気は、宇宙人と交信していたらしく、隕石を振り落せという強迫であつたらしい。

お骨様は、自然界警察の部下で使徒をスパイする役目を持っている。

「なあ、お骨。」

「どうしましたか、マイクロストームさん。」

「竜骨町に恐竜を復活させるのは、いつごろだったけな。」

「1988年の夏ごろですよ。というよりこれバレたらマイクロストームさん、捕まりますよ。」

「まっ、死体を一時的に復活させただけでも自然界では違法だもんな。」

「確かに、自然不正法第24条、どんな時でも死亡した者を復活という行為をさせてはならない。反した者は、懲役6年、罰金を科す。」

マイクロストームは、その行為を人間にすることにしようと企んでいた。

そうすれば自分も人間も、法に罰せられなくて済む。

しかし、今回はお骨も痛恨のミスを犯すことになる。

1988年竜骨町

「おいっ、発掘した骨を見つけたか。」

山野井は、土蔵に言った。

「すみません。まだ14本です。」

「もう少し掘りやがれ！」

「分かりました。」

沓見は、15本目らしきものを見つけた。

一方自然界では……

「自然不正法第5条、自然の天罰は、試練の道具として扱ってはいけない。反するとゲームマスターはく奪または、地位剥奪の刑に処す。」

マイクロストームは、ほかの手段を言った。

「たとえば、人間を手駒にしてそのあと試練というものを。」

「それも無理です。自然不正法第16条、いかなる時も人間を手駒にしたり奴隷にしてはならない。反すれば、ゲームマスターはく奪

または、使徒階級4段階降格。」

「きついなあ、うーん？」

「当たり前です。あなたは、私よりまだ小自然管という階級。私は、極自然管です。」

「階級の違い自然管クラスであっても、俺はまだ自然管クラスの素人ですけどね。」

「しかし、違法を使わない方法で惨劇を起こせます。」

お骨は、マイクロストームの耳を手で隠してコソコソと喋った。

「なるほど、それならバレずに済む。」

そのあと、お骨は、寒冷低気圧と遭遇した。

「これは、専神クラスになる候補、お骨さんじゃないですか。」

寒冷低気圧とお骨様は、マイクロストームの不正を許さない立場にある。

「クエイク・ウェーバー元中神のこともありますからね。」

「降格される落ちにはなるわね。」

竜骨という町の巻 第二話 リュウコツチヨウへようこそ（後書き）

次回 竜骨という町の巻 第二話 真実剥奪行為。お楽しみに！

小説OP主題歌「懐かしき獣がなく」NO収録

小説ED主題歌「闇悲劇」貴方を糧に募る収録

竜骨という町の巻 第二話 真実剥奪行為

お骨は、寒冷低気圧に話していた。

「もし、今回のことが人間にばれたら白クマの二の舞よ。」

「確かに、私があの世界のカケラで人間に話しました。クエイク・ウェーバーの不正行為が発覚したことに気付いたからです。今回もまた、そんなことがあったら容赦ありません。」

「あなたのやり方も研究の余地があるわね。」

「マイクロストームの行動を崩す最善の努力だと思いますが・・・」

寒冷低気圧は、此の二柱の怪しさにつけ狙われた感じになっていた。

人間界では・・・

19本目の骨を見つけていた。

「急いで探そうぜ。とにかく今年の目標は200本だからな。」

山野井は、はりきって言った。

「しかし、200本目標といえども、去年から計画されていたのにそれは多すぎるのでは。」

中尾は、少しネガティブな表情で言った。

土蔵と後原と黒上は、19本目の骨らしきものを見つけた。

「ついに、19本目を見つけたぞ！」

その頃、醍為咀神社では4人の子供と老人がいた。

「おじいさん、もしかしたら心のない者達がまた骨を発掘したようですね。」

「気配が感じ取れる。このままでは恐ろしい災いが起きる。」

北代美は、不安な表情をしていた。

自然界では・・・

「使徒としての自覚は持っています。」

「真実剥奪は、自然不正法第88条で、ある程度禁じられています。それほど危険というわけではありませんが。ばれたら真実を曝す罰が処されます。」

「その覚悟はできています。それでは始めましょうか。」

マイクロストームと寒冷低気圧は交渉成立した。

竜骨という町の巻 第二話 真実剥奪行為（後書き）

次回 竜骨という町の巻 第三話 20の悪魔がさらう人々。お楽しみに！

竜骨という町の巻 第三話 20の悪魔がさらう人々

寒冷低気圧は、20の悪魔を召喚することにした。

「さあ、始めよう。最高の悪魔の従者達よ。」

「寒冷低気圧様、我々に任せれば一発で放します。」

「ではご健闘を。」

「マイクロストーム、どこにいるの。」

お骨は、探していた。

「寒冷低気圧、マイクロストームは。」

「もう人間界に降りられました。」

「あいつ、また何かしかすんじゃないでしょうね。」

「大丈夫です。」

「最近、寒冷低気圧さんのことを信じられなくなってきたのです。」

「それは、誤解を招いたことをお詫びするだけです。」

「そう。」

お骨は、寒冷低気圧を信頼していなかった。

一方、人間界・・・

マイクロストームがにやりとした表情で発掘された骨を見つけた。

「20本ジャスト。」

20の悪魔の従者が現れて、自然の使徒マイクロストームに話しかけた。

「何なりとご命令ください使徒様。」

「さあ、人間を食らいなさい。」

竜骨という町の巻 第三話 20の悪魔がさらう人々（後書き）

次回 竜骨という町の巻 第四話 食われ殺戮。お楽しみに！
今回はグロ描写に注意です。

宣伝、9月16日、人間と自然のスーパーロボット対決。絆を見失った人間に栄光が来るか、試練こそ正義という自然に栄光があるのか。「自然魔術ヒートアイランド」最大の戦いが幕を開ける。

竜骨という町の巻 第四話 食われ殺戮

20の悪魔は、とても攻撃的であつた。

土蔵は外が騒がしいと思った。

「なんだ騒がしいな。なんだあれは・・・」

住民の一人を食い殺している悪魔がいた。

「これは、山野井さんに。」

土蔵は電話を鳴らした。

それがあだになっていることに気がつかずに。

「くそ、何で出ないんだ。」

「ウルルルルルル！」

「わっ、なんだあの声は。」

土蔵は目を驚愕するかのように開けた。

いろんな場所でも同じ現象が起き、そこらじゅうが血で塗り潰された。

土蔵は1人で悪魔20人を見ていた。

「来るな！」

自然の大鎌が悪魔たちを追い払った。

「これは・・・」

竜骨という町の巻 第四話 食われ殺戮（後書き）

次回竜骨という町の巻第五話宴の淋さ。お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9311p/>

自然がお怒りになる頃にシリーズ第五弾、古代獣の鳴き声が聞こえる頃に

2011年11月27日18時52分発行